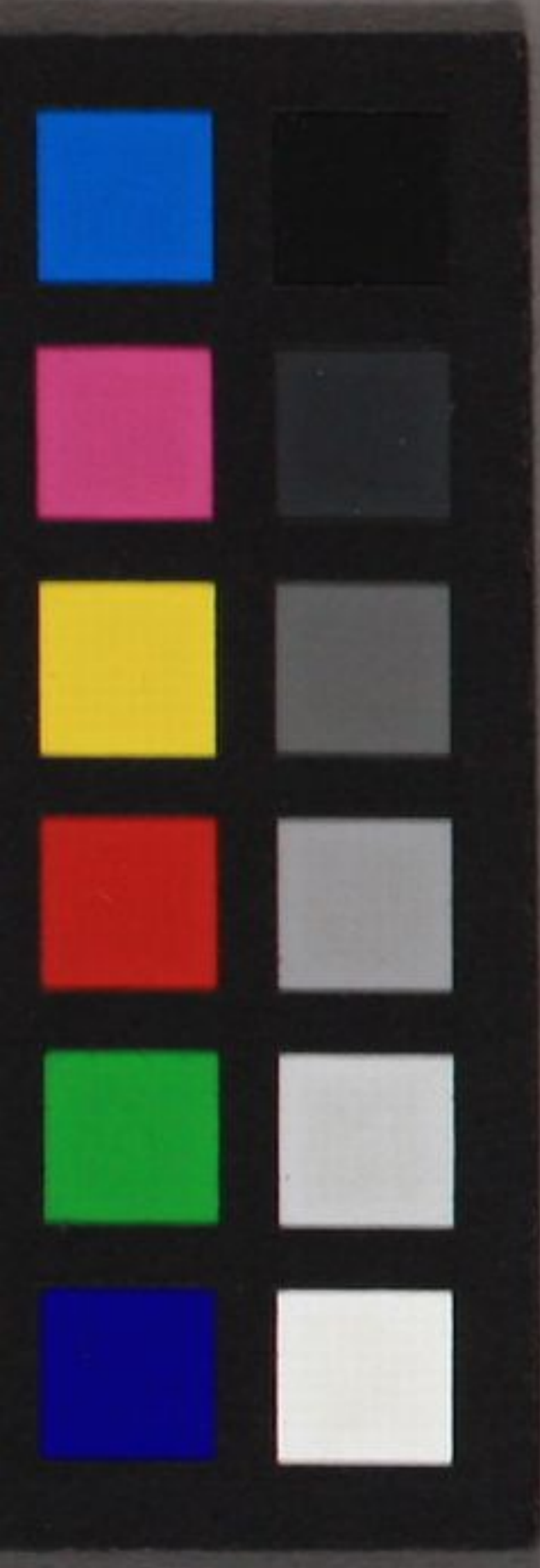


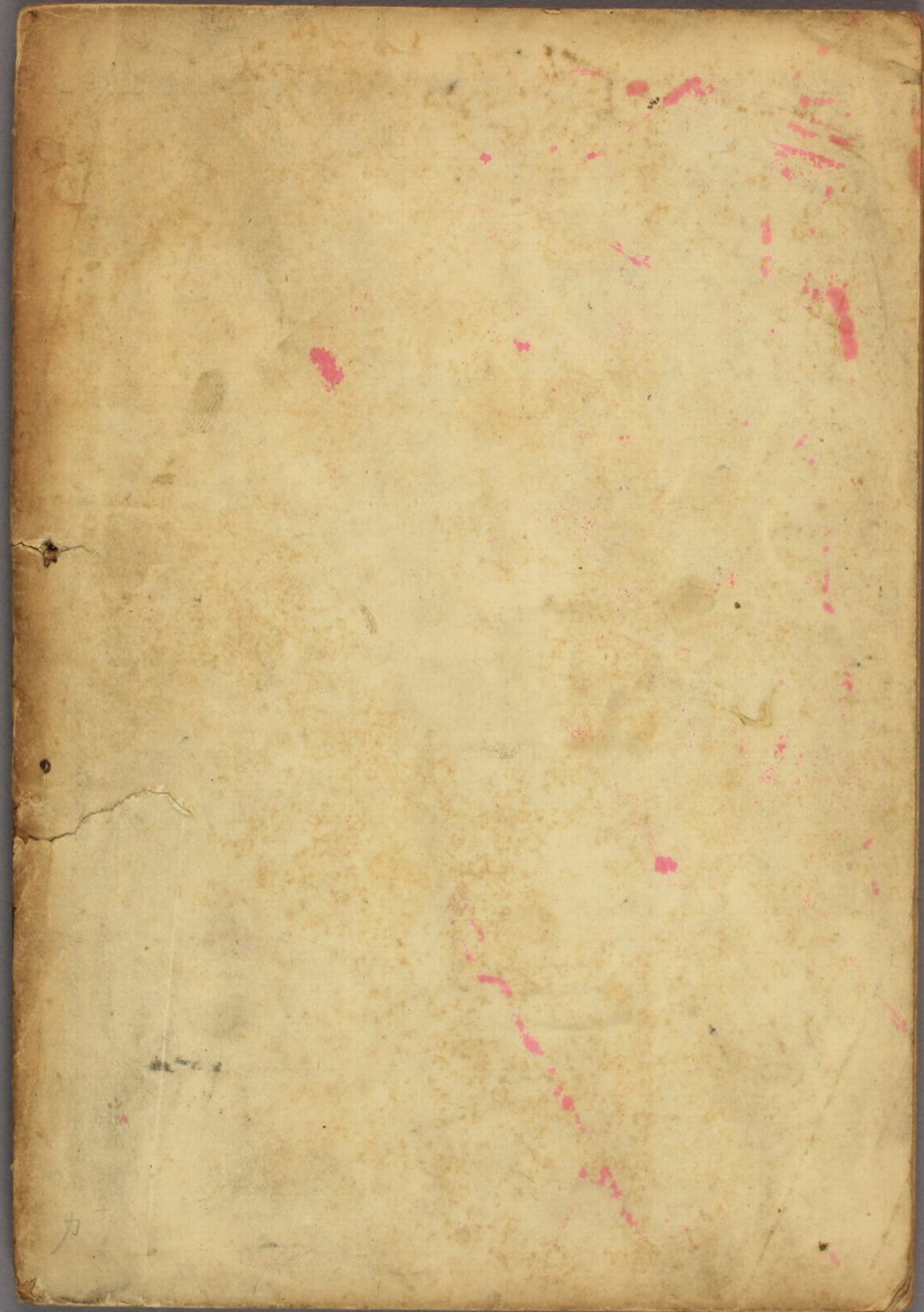
詩集

北の空

秋元蘆風







詩集
北
の
空

秋
元
蘆
風



北海生活の記念として
この集を發行す

序 詩

灰色の空の下を

灰色の胸を抱きて、

灰色の旅人は行けり。

緑色の空の下に

緑色の思抱きて、旅人は

灰色の空を遠くしのぶ。

序言

札幌農科大學在職中、(明治四十年八月より四十三年七月に至る)殊に明治四十一年の始より四十二年の終近き頃まで、凡そ二年間に成れる詩の創作の大部分を名けて、詩集「北の空」といふ。此等の詩は、何れも、當時一度び雑誌或は新聞に公にせるものなり。

集むる所五十篇、其の中の一二を除きて、他は悉く北海の自然若くは人事に關せざるものなし。たとひ北海其の物に直接の關係を有せざる一二の詩といへども、またこれ作者自身の、其の地に於ける生活の一端とし

て見るべし。されば、其の詩に横はる所のものは、總じて北海と著者との二ならざるべからず。而して余は茲に、其の詩が概ね著者の心的生活の反影なる事を公言す。即ち是れ、著者が北海詩集なり。

此の集に現はるる所の思想は舊かるべく、詩の形式に於ても亦格別新しきものを見出さざるべし。中には「夜半」の一篇の如き、口語を以て試みしや、新らしき作なきにあらねども、其の多くは、舊き思想を、舊き形式を以て歌ひ出せる單純なる抒情詩若くは叙事的抒情の作品に過ぎず。従ひて讀者は、此の集の中に所謂近代的特色を見出すこと能はざるべし。これ著者のひそ

かに聴づる所なれども、そは元より、久しく詩を願ひる能はざりし著者が、たまたま北海の自然と自己の境遇とに感じて、おのづから歌へる舊き詩のしらべなりしのみ。従ひて著者は、此の集を以て進歩せる現今の詩壇に敢て捧げんとする者にあらず。たゞ著者が生活の記念として、これを出し置くのみ。しかれども若し此の集の中に、幾何なりとも北海の自然と著者の面影を傳ふるものあらんには、余の幸なり。

著者は嘗て、北獨の詩人シュトルム及びリ、エンクローンに倣ひて、及ばぬながらも其の詩に地方的特色を發揮せん事を願ひき。しかも自から其の器にあらず

るを知りて、はやく其の創作を絶ち、爾來心を近代詩若くは現代詩の研究に潜めぬ。されど著者は、此の集に於て詩人シユトルム其の他に貢ふ所ある事を茲に一言せざるべからず。

表紙圖案は、郷友原田儀作君の厚意に成れり。記して謝意を表す。

明治四十三年初秋 東京雜司ヶ谷にて

著者

目次

北の空

四月の詩 七篇

雪は解け。四月はじまる……………一
鳥の歌風になびきて……………二
ゆたかにも芽はふくらみて……………三
雪はなほ山にのこれど……………四
春よ、汝を我等久しくも待ちたり……………六
そは春の初めなりけり……………八
風よ、汝は何をか嘆く……………一〇

冬の歌一、俗調十篇

森も、林も……………一三
 日がな一日……………一四
 海のあなた……………一五
 ここは北海……………一六
 うまし、生れの……………一七
 檐のつららの……………一八
 北の島國……………一九
 なれの來りて……………二〇
 蒼きみ空の……………二一
 北の海邊も……………二二

冬の歌二、七篇

南の國の歌人は……………二三
 地よ、地よ……………二四
 鳥よ、鳥よ……………二六
 おそろしき冬の力や……………二七
 冬の來りて……………二八
 雪に埋るる……………二九
 きのふの吹雪……………三〇
 秋より春 七篇
 來れり秋は……………三一
 秋のおもひ……………三四

北國に冬は來れり……………三六
 きさらぎはじめ……………三九
 彌生まぢかし……………四二
 山越えて春は來ぬらし……………四五
 北海の子供の春の歌……………四七
 旅のおもひで 十篇
 ひととせは早も去りしか……………四九
 絶望はわれを襲ひて……………五一
 都、汝はわれになつかし……………五二
 なつかしき都見捨てて……………五四
 わが乗れる同じ車に……………五五

はじめての船路なればか……………五八
 停車場の待合室に……………五九
 枝繁き楡の樹蔭に……………六〇
 アカシヤのみどり並木路……………六一
 北國の秋はきたりて……………六二
 津輕の海其他 九篇
 津輕の海……………六三
 ある時……………七〇
 工夫のなげき……………七二
 小兒二篇
 (一)息さしすらも……………七九

北の空

北の空終

(一)なが見る夢は……………八〇
「時知らず」の花……………八二
夜半……………八三
をさなき時……………八七
夕……………九一

雪は解け、四月はじまる。
花はなほ枝に咲かねど、
鳥はまだ庭に鳴かねど、
やうやうに萌えいづる草。
——
人は今なやみ忘れて、
うるはしき五月をおもふ。

*

四月の詩

七篇

1

“Die Sonne leihet dem Schnee das Prachtgeschmeide,
Doch ach! wie kurz ist Schein und Licht.
Ein Nebel tropft, und traurig zieht im Leide
Die Landschaft ihren Schleier dicht.”—— D. v. Liliencron.

鳥の歌風になびきて、
日は郷にあまねくわたり、
畑はいつか鋤に反され、
路傍に草はいでたり。——
子供等よ、汝等はやも野邊に來ぬるか？
われにまだ風の寒きに。

*

“Die Wiegen sind's, worin der Frühling
Die schlimme Wintezeit verträumt.” — Storm

ゆ たかにも芽はふくらみて、
風にゆらぐ落葉松の枝。
ながき、さむき冬のあひだを
そがなかに春や夢みる、——
さながらに、それや搖籃。

雪はなほ山にのけれど、
郷ははや草のはつ萌え、
灰色はいろの空はふたたび
緑なる、さやけき色に。

ストーブの外うちさるるまま、
閉ざされし窓もひらかれ、

門邊かどにはつどふ子供等、
家の内は笑ふこゑごゑ。

普請場かしくばに音のひびくや、
民は出でて畑にはたらく。——
かかるとき、げに、かかるとき、
北國きたくにの春は立ちぬる。

春よ！

汝を我等久しくも待ちたり。

灰色の空ながめつつ

しきりにも雪の降るとき、

胸はただ古きなやみに。

春よ！

汝を我等久しくも待ちたり。

ほのぐらき室むろにこもりて、

窓かたく鎖さるるとき、

心ただ暗きうれひに。

見よ！今を、四月——早春さうしゆん。

胸の戸はややに明るく、

あこがれは五月の空に……

憂愁は晴れし緑みどりに……

あゝ、春よ！

我等汝を久しくも待ちたり。

そは春の初めなりけり、
寒國の四月のひと日。
ひねもすの雨霽れし夜を、
せはしげに鐘は鳴りける。
いましめの衢の鐘は、
絶間なく、ただにせはしく。

「すは火よ」と、寝たるも起きつ、
起きるたる者は戸外に、
街路には人のむらがり。
火は見えす、「火事や何處ぞ？」
「雪解けの水は溢れて、
大川の橋ぞ落ちぬる。」

※

風よ、汝は何をか嘆く？

ヒュー、ヒューと空にわめきて。

風よ、汝は何をか告ぐる？

ガタ、ガタと戸をばゆすりて。

世は春のなかばなるとき、

この郷の春は淺くて、

やうやうに萌えそむる草。

雪はなほ山にのこれり。

されど晝は地を射かへす
あたらしき、ぬるき光に、
五月、五月、間なく來ると、
觸れやすき氣こそは躍れ。

夜となれば、またも烈しく

吹きすさぶ北の冬風。

よろこびの胸はふたたび

かなしみの思に曇る……

風よ、汝はいつ迄か吹く？
かなしげに空にわめきて、
風よ、汝はいつ迄も泣く？
よろこびの春は來ぬるに。

(以上七篇四十二年四月中の作より)

冬の歌一 俗調十篇

*
森も、林も、野もまた丘も、
雪に埋るる北の冬。

小さき我家に身は閉ぢられて、
日に戀ふるは日の光。

暗き窓邊に胸こそ黙せ、
おもひは飛ぶよ、南へ！

*
日ひがな一日いちにち日の影照らす、
胸も悲しき北の窓。

冬は来りて檐端のきはに高く、
積つるなやみの雪の山。

来くるか、来くるかと春をば待てど、
外そとは吹雪ふぶきの風ばかり。

*
海うみのあなたあなたの遙とほけき國くには
美うまし南國なんこく、——生うまれ郷さと。

空そらもみどりに、山やままた青あおく、
日ひ日びにながむる不二ふじの峯みね。

春はるは光ひかりの照あり添そふ檐端のきは、
花はなに小鳥こどりのうたふ國。

*
こゝは北海、波さへ荒き、
むかし無人の蝦夷が島。

今は人住み、町さへ開け、
われも近ごろ島の人。

年のなかばを雪降る寒さ、
冬は殊さら故郷思ふ。

*

美し、生れの南の國は、
今を彌生の春の空。

照らす日影もいとどやかに、
野には青麥、庭に花。

空に雲雀の春をぞ歌へ、
ここは北國、——雪の冬。

檐の垂氷の漸く解けて、
胸も希望にひらく頃。

心も悲しく胸をば襲ふ、
冬のすさびの雪、吹雪。

外は春風野に吹くものを、
なせに北國、春おそき？

*

北の島國冬なほ去らず、
地は五尺の雪の下。

畑は眞白に、鳥野に見えず、
民は籠るか、小舎の内。

日影をぐらき南の窓ゆ、
天を仰ぎて、待つは春。

*
汝の來りて早やここ六月、
年のなかばは冬の内。

地も、畠も、野もまた草も、
春を待つぞよ、雪の下。

鳥も啼かねば、歌さへ黙す、
早く往け、往け、北の冬！

*
蒼きみ空の折折見えて、
めぐみ嬉しき日の光。

春の希望の漸くきざす、
今を躍るは人の胸。

雪も溶け、また氷も解けて、
早く來よ、來よ、北の春！

*

北の海邊も春としならば、
鳥は歌はん、花咲かん。

ながき冬をば籠りし後の、
春はわけても樂しきに。

北の島人、かなしむなかれ、
やがて來らん、島の春。

(以上十日吹雪四十一の年作三)

*

雨の國の歌人は
今を歌はむ、春の歌。
北にさまよふ歌人は
なほも歌ふよ、冬の歌。

冬の歌二 七篇

*

地よ、地よ、

汝は戀し。

北の冬

あまり永く、

汝を見ざる

茲に久し。

地よ、地よ、

汝は戀し。

雪の衣きぬ

はやく脱ぎて、

春の日に

面向むかけよ。

地よ、地よ、

汝は戀し。

春の草

萌ゆる中に、

われ寝ねて

汝をし觸れん。

*

鳥よ、鳥よ、野の鳥！ 汝は今

いづくにか在る、野の鳥よ！

北國きたくにの冬は来りて野は眞白ましろ、

五尺の雪は世をおほひ、

森はまた、樹の葉は既に枯れつくし、

草むらも雪にうもるるきのふ、けふ——

北國きたくにの鳥よ、いづくに汝は潜む？

物なべて雪にかくるる此の冬を、

いづくにか在る、あゝ、鳥よ、鳥よ、野の鳥、

汝は今、いづくにか在る野の鳥よ！

*

おそろしき冬のちからや、

雪ふかく地つちをおほへば、

かなしみに思はしづみ、

胸はいま、なやみに閉す。

しかはあれ、さびしきゆふへ、

聞くはただ哮ゆる風の音と——

わが胸の琴はなげきて、

しめやけく響は傳ふ。

*
冬の來りて水の音止めば、
胸の小琴の音もこそ黙せ、
北は吹雪の音聞く毎に、
歌は悲しく、琴は鳴る。

雪に埋るゝ冬の日、
窓を鎖して悲しみあれば、
町に來りて、野の鳥
餓を呼ばふか——
がを、がをと。

*
きのふの吹雪跡もなく、
けふは静けき雪の窓。
小鳥来て鳴く朝の日に、
春ののぞみは見えにけり。

(以上七篇四十一年三月
十日より十三日迄の作)

秋より春 七篇

來れり秋は

來れり秋は北海の、
いつしか春の過ぎ去りて、
來れり秋は北海の——
濃蒼こゝろに空は澄み渡り、
涼しく風の吹きそよぐ。

來れり秋は北海の、
しばしと夏も暮れ果て、
來れり秋は北海の——
林檎は園をりにくれなるに、
畑はたには青きキャベージや。

來れり秋は北海の、
春また夏の短かくて、
來れり秋は北海の——
此地の秋ぞ樂園と、
よろこぶ、共に北の民たみ。

來れり秋は北海の、
違たがはず時の廻めぐり來て、
來れり秋は北海の——
さもあれ、またも雪ふかき、
かなしき、永き冬の來こん。

(四十一年初秋)

秋のおもひ

日の光が段段弱くなつて、
蒼空を見る日は稀になつた。

雨はしとしと降つて

夜はますます寒くなる。

庭には蝦夷菊の花が萎れかかつて、
垣のほとり林檎の實が紅らんでゐる。

北から吹いて來る風は
今、冷たく窓に當つて、
はらはらと落葉を散らす。

あゝ、深い秋!

雪の降るのも間近い。

渡鳥はもう疾うに飛び去つたのだ!

自分はいつ南に歸るだろう?.....

北國に

冬は來れり

うすぐもる

空に、日はいま

影淡う――

光よわき、わが

ガラスの窓。

と見れば、――外面

いと靜に、音もなく

降るや白雪――

わが胸は

ふとも震へつ。

「あゝ、冬よ、

北國の冬――

冬は今

我等襲ふと、

われ知らぬ

なげきの吐息。

折からを
屋根の方かたにて、
ガオ、ガオと
鳴くは鳥か。――
何となく
聲もうるみて……………

わが心

またも嘆きぬ。

「北國きたくにに

冬は來れり。」

(四十二年初冬)

きさらぎはじめ

時ははや二月きさらぎはじめ、――
世はすでにいづこともなく、
かなしみの冬や去りて、
日は日ごと春めきぬらし。

あれたかき南の國の
うるはしきわが故郷ふるさとは、
空を風しづかにわたり、
野に梅の今か咲くらん。

緑なる草野に萌えて
麥畑にうごく人影。
日の影は丘を照らして、
鳥の歌森に響かん。

あたたかき春を迎へて、
野の小川ささらぎ流れ。
谿の間の泉ゆらぎて、
天地に響湧くらん。――

うるはしき郷をはなれて、
幾百里、日本の北の
此處や、げに遠き島國。
冬はなほ去らんともせず。

終日を閉ぢし小窓に
日の影は薄う照るのみ。
森も、野も、丘も、衢も、
地はなほ雪に埋れて。……

(四十一年二月)

彌生まぢかし

“Wohl leuchtet die Ferne mit goldenem Licht,

Doch hält mich der Nord, ich erreiche sie nicht.

O die Schranken so eng, und die Welt so weit,

Und so flüchtig die Zeit!” — Geibel.

彌生まぢかし。——遠郷は

照りこそ渡れ日の光、黄金まばゆく。——

然はあれ、日は薄暗き空の下、

心は沈み、氣は痺み、

胸は今懊惱の棲處。——身は北に、

遠なる光戀ふれども、
行くに由なし。

あゝ、かの郷や、——暖けき

光は森に、野に溢れ、緑かゞやか。

鳥歌ひ、泉は流る谿の底、

響は若く、音は高く、

歌人を待つは南國。——遠方ゆ

美音はわれを招けども、

日は唯過ぐる。

鳥の翼をわが持たば、
地を離れて南方へわれや翔らむ。
人の身を北に繋ぐは生の紐、
時をば怨じ、日を嘆き、
憧憬の歌は密やか。——咽び音に
黄金の春を慕へども、
春老い易し。

(四十一年三月)

山越えて
春は來ぬらし

«Horch, von fern ein leiser Harfeenton!

Frühling, ja du bist's!

Dich hab' ich vernommen!» — Moerike.

山越えて春は來ぬらし、
空はいま緑にひらく。

谿吹くは柔ら、そよ風、
先づ渡る春のみつかひ。

冬はなほ別離をしめど、
物みなに充つるよろこび——

山越えて春は來ぬらし、
高きより傳ふ琴の音……

(四十一年五月)

北海の子供の
春の歌

春が來た、

春が來た、

北の島へも春が來た。

久しく待つた効あつて、

己等が郷へも春が來た。

姉さん、兄さん、

サーサー行きましよ!

野に雪が解けて
青草が萌えたに、
姉さん、兄さん、
籠をば提げて、
早く行きませよ、草摘みに！

表の方では

チューチュー、チューチュー、

「野に來い！」「野に來い！」

——小鳥が鳴いて居る。

(四十一年五月)

旅のおもひで 十篇

旅のおもひで

*

一年ははやも去りしか、——
おもほへば昨日のごとし。
都をば後にのこして、
わが北に旅立ちし日は。

そは、夏もすでに暮れがた、
立つ秋の風は涼しう、
汽車の窓入りも來りて、
旅ごろも吹きも當てしか。

時の圈わのはやきめぐりや、
一年ひととせははやもめぐりて、
秋の風またも立ちたり。
何となき旅のおもひで。

*

絶望はわれを襲ひて、
ひとたびは暗やみの深みに、
身はいよよ沈みゆきけり。

かすけくも希望のぞみの光、
遠空とほぞらにはのめきそめつ。
身はややに浮びいでけり。

都、^{*} 汝はわれになつかし、
都、 汝はわれに戀しき。
げにや、 汝はわかき男が
あこがれの思の的か。

かつてわれ 汝と別れて、
一年を吉備のわびすみ。
さびしさの思堪へかね、
ひとたびは 汝に歸りき。

さはれまた 汝と別れて、
身は今や 北海の邊に。――
生活のたづき 端なく
われをしも 此處に逐ひしか。

都、 汝はわれになつかし、
都、 汝はわれに戀しき。
いつの日か 汝に歸らん、――
夢は 夜夜都に通ふ。

*
なつかしき都見捨てて、
身は北に行く身なれども、
遠空の星あふぎつつ、
新妻ととも初旅、
あたらしき思ひそみき。——
その思、いま、はた、いかに？

*
わが乗れる同じ汽車に、
いくたりの人や乗りけん。
そのなかに乗るも交れる
出稼の男ありけり。

その名をばわれは知らねど、
その故郷のわれにわかねど、
身のふりに、言葉のさまに、
それとしもわれに知られき。

青森に車はとまり、
乗客みな其處に下りしが、
あくる日の汽船のなかに
彼もまた乗りや交れる。

函館に船はとまりて、
乗客また陸にあがるや、
そのなかに、はからずもわれ
かの姿またも見いでぬ。

さはれ、ああ、汽車はふたゝび
吾等をば分ちたりけり、
かくてまた遇はん時なく。——
その人やいかがつらん。

＊
はじめての船路なればか、
妻も酔ひ、われも酔ひけり。
波さして荒きにあらねど、
風さして強きにあらねど。

半日の津輕の海路、
その間だにいたく惱みて、
旅人は岸を待ちけり。――
おもひでの津輕の海路。

＊
停車場の待合室に
初に見しアイヌの夫婦。

その夫婦われは見つめて、
めづらしの思ありしか。

その後をアイヌ見るごと、
かの二人おもひいでらる。

枝繁き楡の樹蔭に
旅の杖しばしとどめて、
石狩のひろ野のかなた、
沈みゆく秋の日ながめ。
來しかたをかへり見にけん、
ふる郷をおもひ出にけん、
その樹枝、葉枯れ、葉落ちて、
葉はまたも暗う繁りぬ。――
樹の蔭のおもひはふかし。

*

アカシヤのみどり並木路、
その樹蔭、思あらたに
いくたびか二人あゆみし。
並木路の雪は消えはて、
アカシヤの葉こそは繁れ、
みどり蔭、二人あゆみし
その時をいかに逐ふべき。

*
北國きたくにの秋はきたりて、
ゆたかなる林檎のみのり。

家家の軒端を、またも
くれなるの色はかざりぬ。

あからめる果實こゝろみ見るだに、
去年こぞの秋しのぼるゝかな。

(以上十篇四十一年初秋某夜の作)

津輕の海其他

九篇

津輕の海

(汽船陸奥丸は數多の移住者を乗せた
るまま、濃霧のために他の船舶と衝
突して、津輕の海に沈みぬ。……
感じて成れるは此の歌。)

雪しげき冬の闇夜を、
北の海、行方ゆくてはわかず。
船と船ハタと衝き合ひ、
その一つ波に沈みぬ。

數積める荷物もろとも、
三百の乗客も共に、
轟きの音ともろとも、
底深き海の藻屑と。

ああ、かくて冬の闇夜を
雪まぢり風吹きすさび、
波はただ暴れにぞ暴れて、
行き過ぐる船だにあらず。

黎明の風は收まり、
降る雪のやうやく止めば、
うねうねと寄せぬる波に
漂ふや、名残の破片。

冬の日の悲しき照らし、
昨夜の夜の海を嘗むるに、
寂寥は海をば統べて、
飛びかふは、海鳥の群。

#

大いなる船やいづこそ？——
三百の人やいづこそ？——
おもへば、あな、恐ろしや、
闇の夜の波のたはぶれ。

沈みける人の中には、
親あらむ、妻子もあらむ。
兄、弟、さては姉妹、
老、若き、男、女も。

わきて又あはれなる者、
そは、おほき出稼人か。
まづしかる家に生れて、
生活のたづきもあらず。

なつかしき郷を離れて、
西、東、世をばさまよひ。
あるはまた遠くわかれて、
海のこなた、島に渡ると。

うるはしき郷を見捨て、
はるばるは來りしものか。――
あな、憎や、波のたはぶれ、
汝等、皆、海の飼物と。

痛ましく途に朽ちたる
ああ、汝等、出稼人よ！
わが郷は遂に無くして、
たのしみも遂に歸らず。

空しくも海の藻屑と、
消え果てし汝等偲ぶに。
そぞろにもわが眼うるみて、
旅の身のおもひ悲しや。

われもまた南をはなれ、
北のかた、島に來し身ぞ。
いつかまた郷を見いでん？――
おもひでの津輕の海よ！

(四十一年三月十日)

ある時

某古本屋の店頭に、わが編みたりし西詩集を見いでて。

あな、あはれ、店の片隅
あかづける書もろともに、
かなしくも身は棄てられつ。
汝は、そも何を夢みる。
古びたる詩の一卷、
そは、嘗てわが手に成りし。――

さながらに春の花草、
ひとたびは人に摘まれて、

やはらかき手にも取られつ、
あたたかき口にも觸れつ。
あるはまた、机のほとり、
親しげに置かれもしつらん。

さびしくも路のほとりに、
そのかみを汝は偲ぶや？――
郷遠く迷ひ來りて、
北の國、市のゆきすり、
はからずも汝見いでつ。
そぞろにも動くわが胸……

工夫のなげき

(ある日、新聞の記事を見來りて作れる。其地の新聞紙は、斯の如き工夫生活の惨状を記載したり。)

分れ來て、ここに二年、
ふる郷の妻子やいかに？
——
うかうかと海を渡りて、
出稼下かきの群むねに入りしが。

人のいふ事はうらはら、
何ひとつ善き事のなく、
身はすでに未開みかひの里さとに
あはれなる工夫こうふのひとり。

文明の御世みよのめぐみを
ありがたく人はおもはん、
聖代せいだいの下したにもいまだ
かかる状さまなげくべしとは。

あらたなる鐵道工事、
この工事成らん日までに
幾人の胸はちぎられ、
幾人のいのちほろぶる。

さながらに馬か、獸か、
馬ならば、馬にてあらん。
なまじひに人とうまれて、
むしろわれ、それをぞ悔ゆる。

あしたより夕ゆふにいたる、
一息いきのつく間まもあらで、
額ぬかに汗あせ、骨身ほみにいたみ、
夜よは寝ねるに板床いたどのうへ。

粗食そしょくこそ身には馴なれつれ、
腹充はらみたぬ三度さんどの食事。
勞銀らうぎんのなかば空しく
親方おやかたが酒買しうばいふ料しりょうと。

北の空とほく望みて、
ふる郷に人や待つらん。
みんなみの方をしのびて、
わが袖の濡れぬ日ぞ無き。

人里をはるか離れて、
山の奥、此處なる小舎に、
罪人と、この身さながら
牢獄の固きいましめ。

遁れんに道なき深山、
遁るとも、捕へられては、
彼がごと、なぶりごろしか。
さてはまた谿間のもくづ。

きのふかも、「音」が逃けたる——
すぐさまに追手はかかり、
あやうくも峠ふところ、
一撃に銃のけむりと。

警察のそなへはあれど、
法律のおきてはあれど、
この山に罪は自由か、
この里に人はあらぬか。――

北の空とほく望みて、
ふる郷に人や待つらん。
みんなみの方かたをしのびて、
わが袖の濡れぬ日ぞ無き。

(四十一年初夏)

小兒二篇

(一)

息いきざしすらもわかぬげに、
ただ安らかに幼こ兒は、
晝ひると夜よのわいだめもなく、
すやすやと――
だだ安らかに幼兒は、
思のままに眠るなり。

ああ、われも、
かつてはありき、
かかる時。

(二)

汝が見る夢は

何の夢？——

わかき男女が

見るといふ、

思ひの人の

それならで。

ただにゆかしき

母の夢。

汝が見る夢は

何の夢？——

老いたる者が

見るといふ、

墓場の闇の

それならで。

たゞにたのしき

晝の夢。

(四十一年夏)

「時知らず」の花

日照らせば、「時知らず」の花

こころよげにも、首かみもたげて咲きにほふ。

日くもれば、「時知らず」の花

うなだれて何をおもへる——

照り、曇り、日によりてこそ又わが胸動け、

きのふはも光と共に氣はあがり、

けふはまた、曇り日の心沈みて日は暮れぬ。

あゝ我の、似るか汝いましに——

あはれ、あはれ、「時知らず」の花よ。

(四十二年六月作)

夜半

夜半よなかだ、

眼が冴えて

ねむられぬ。

くるしい、

おもい、胸が、

壓おさされるやう、

思がおもひを生む。

あたりは静かだ、

枕邊の火は、
ほのぐらい、さみしい光を投げて居る、
床の上に。

妻の寝顔の

何とさみしいではないか？

瘡せおとろへたその頬、

薔薇の色は疾くも褪せて了つた。

眼の谷もまた落ちて窪んだ。

昔のおもかげは

どこにか？

蒼白い頬のおもてに

漂ふは、たゞ生活のくるしみ。

チクタクと胸を刻んで

時計の音がひびく。

母に抱かれて坊はいま、

スヤスヤと何の夢を見て居るのだらう？

あどけないその顔付、

ああ……

自分ももう一度小供になりたい、

そしてあのやうにスヤスヤと眠りたい。

夜は更けてゆく、

自分ばねむられぬ。

(四十一年秋)

をさなき時

(たのしきは、をさなき時か——

その時よ、春のその時。)

野に、森に花はほほるみ、

空に、樹に鳥はうたひき。

(たのしきは、をさなき時か——

その時よ、春のその時。)

汝が胸を吹くはそよ風、

汝が眼にうつるあらた世。

(たのしきは、をさなき時か——)

その時よ、春のその時。

雨風のはげしと知らで、

汝は母の膝にねむりき。

(たのしきは、をさなき時か——)

その時よ、春のその時。

さながらに天つ歌國、

その國に汝はあそびき。

(たのしきは、をさなき時か——)

その時よ、春のその時。

母戀ふる涙持てども、

身をなげく涙なかりき。

(たのしきは、をさなき時か——)

その時よ、春のその時。

汝がおもひ飛ぶがまにまに、

汝が聲は言ふにまかせき。

(たのしきは、をさなき時か——
その時よ、春のその時。)
花とともに汝はほほるみ、
鳥とともに汝はうたひき。

(たのしきは、をさなき時か——
その時よ、春のその時。)
いつしかも時はうつりて、
胸おそふ秋のかなしみ……

(四十一年秋)

夕

日は懸る
丘の樹。

路いそぐ
旅びと。

森には、
斧の

しきり。

來^こん平和、——
空に星二つ三つ。

若き女^めは、
谿^{たに}の間に
人をこそ待て。

(四十一年夏)

詩集北の空終

わが歌の
しらべは古し。
「君なに故にかゝる歌
うたふ」と人の問ひもせば、
ただほほゑみて、
成りぬるままに歌ふのみ。

野の鳥の
歌はとりどり。
「君なに故にかゝる歌
うたふ」と人の問ひもせば、
ただ聲立てて、
鳥は歌はん、おのが音を。
—— 舊作より ——

譯著書目録

秋元 蘆風

一、紛紅集 (舊刊) 譯

明治三十七年六月
東京日高有隣堂發行

獨逸七大神人の詩六十篇を譯載す。

二、野葡萄 (舊刊) 譯

明治三十八年十二月
東京日高有隣堂發行

獨逸詩家十餘人の詩二十七篇の譯及び森陸十四篇の詩を集む。

三、シルレル詩集 (舊刊) 譯

明治三十九年一月
東京東亞堂書房發行

シルレル物語詩の名篇を譯載す。

四、鴛鴦曲 (舊刊) 作

明治四十年六月
東京左久良書房發行

ゲーテ叙事詩の名作「ヘルマンとドロテア」の梗概を歌へる長篇。

五、鐘の歌評釋 (舊刊) 著

明治四十年八月
東京東亞堂書房發行

シルレル名作鐘の歌長篇の評釋。

六、詩北の空 (新刊) 著

明治四十三年十一月
著者發行

創作五十篇是れ著者の北海詩集なり。

七、歌劇タンホイゼル (近刊) 譯

ワグネル歌劇名作の翻譯(雜誌心の花所載)。

八、獨逸抒情詩集 (近刊) 譯

現代或は近代獨逸抒情詩人の特色ある抒情詩を主としてクロッパシュトック以後現代に至る獨逸詩人の名作百餘篇を譯載す。獨逸抒情詩の選譯集なり。

九、獨逸歌謠集 (近刊) 譯

獨逸古代詩人より現代詩人に至るまでの歌謠的作品の傑れたるもの百餘篇を選びて譯載す。獨逸抒情詩集と姉妹篇たり。

十、獨逸抒情詩及び抒情詩人 (近刊) 著

獨逸抒情詩及び抒情詩人に關する研究。前二集と又姉妹篇をなす。

(明治四十三年十一月)

明治四十三年十二月廿八日印刷
明治四十年一月一日發行

東京市小石川區雜司ヶ谷町百十六番地

著作兼發行者 秋元喜久雄

東京市小石川區雜司ヶ谷町百十六番地

發行所 獨逸詩文學會

東京市神田區中區樂町四番地

印刷者 吉岡省吾

東京市神田區中區樂町四番地

印刷所 秀光舍

詩集北の空
不許複製
定價金五十錢

發賣所

東京市神田區鍛冶町八番地

東亞堂書房

振替口座一七一 電話本局八八四